



#### 4) 分析方法

Fisherの直接確率法にて、有意水準5%で判定した。

#### 5) 倫理的配慮

調査によって得られたデータは当研究以外には使用しないことを説明し承諾を得た。

### IV 結果

#### 1) SPの説明後の手袋着用頻度について

乳児・幼児・学童別に、手袋着用頻度について調査したところ、乳児においては、「かなり低くなった」と、「やや低くなった」がともに0%、「かなり増えた」が67%、「少し増えた」が33%であった。幼児・学童では、「かなり低くなった」、「やや低くなった」がともに0%、「かなり増えた」が44%、「少し増えた」が44%、「変わらない」が12%であった。「かなり増えた」と「少し増えた」と答えた人数を合わせ、「変わらない」と答えた人として、乳児・幼児・学童を比較した結果、手袋着用頻度の変化に有意差は認めなかった(図2)。

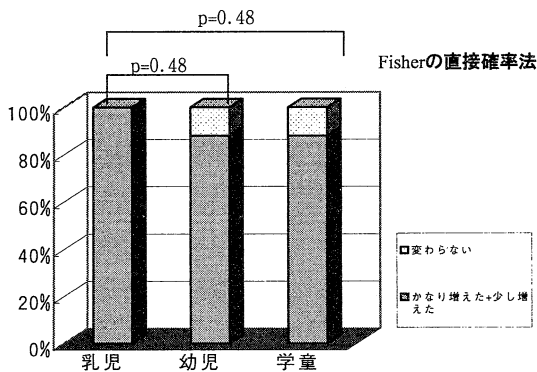


図2 SPの説明後の手袋着用頻度について

#### 2) SP説明後の感染予防に対する意識の変化について

「かなり高まった」が33%、「やや高まった」が61%、「変わらない」が6%であった。「やや低くなった」「かなり低くなった」と答えた人はともに0%であった(図3)。

#### 3) 手袋を各場所に設置した後の手袋着用頻度の変化について

乳児では、「少し増えた」が33%、「かなり増えた」が67%、幼児では、「少し増えた」が33%、「かなり増えた」が55%、「変わらない」が12%であった。学童では、「少し増えた」が28%、「かなり増えた」

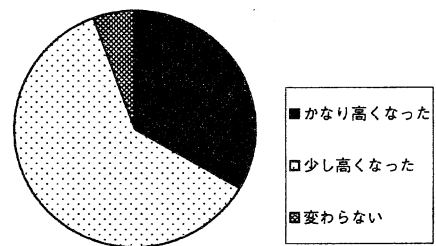


図3 SPの説明後の感染予防に対する意識への変化

が55%、「変わらない」が17%であった。「やや低くなった」「かなり低くなった」と答えた人はともに0%であった。また、「かなり増えた」と「少し増えた」と答えた人数を合わせ、「変わらない」と答えた人として、乳児・幼児・学童を比較した結果、手袋着用頻度の変化に有意差は認めなかった(図4)。

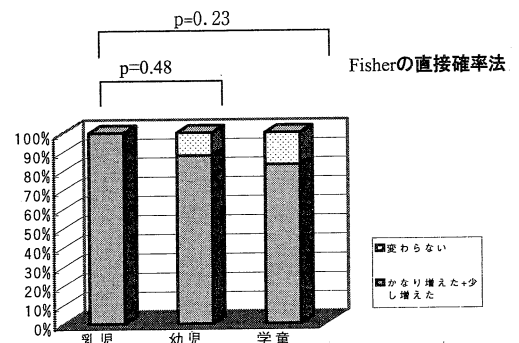


図4 SP説明後の感染予防に対する意識の変化

また、SPの説明後手袋着用頻度が変わらないと答えたうち、75%は手袋を各部屋に設置した後の手袋着用頻度も変わらないと答えていた。

「変わらない」と答えた人を調査したところ、元々手袋着用頻度が高かった。

#### 4) SPの説明後・手袋設置後の手袋の消費数について

2005年4月から9月までの手袋の消費数を調査したところ、8月と9月が他の月の手袋消費数の平均数22箱と比較して請求数が多かった(図5)。

箱(1箱100枚入り)

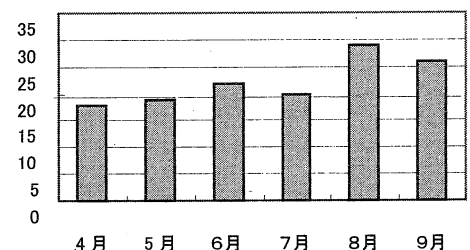


図5 月別手袋使用数

## V 考察

前回の私達の研究において、当病棟看護師は「年齢・排泄物から感染源が検出されているかどうかを問わず、排泄物は不潔である」という認識と、「感染予防のために、手袋着用は必要である」という認識をもっていた。

しかし、感染源が検出されている患児の排泄物に接触する可能性のある処置時には手袋着用率が高いのに対し、非感染患児に対する処置時には手袋着用率が低いという結果が得られており、認識と行動との間にずれがみられていた。

そこで今回、非感染患児のケアの際の手袋着用を推進させるために、SPの説明による動機づけを行った。その結果、感染予防に対する意識が高まり、手袋を着用するという行動が伴い、手袋着用率が上昇した。

動機づけとは、「人間に行動を生起させその活動を方向づけ、持続させる一連の力動的な心理過程である。動機づけは、行動の推進力の働きを持つといえるが、その具体的な働きには、行動を始発する働き、一定の目標に行動を方向づけ導く働き、そして行動を強化する働きがある」<sup>3)</sup>といわれている。SPの説明が手袋を着用するという行動を始発する働きとなり、感染を予防するという目標に導いたと考えられる。

そして、手袋を各場所に設置し、病棟内の物理的環境を整えたことが、行動を強化する働きとなったと考えられる。

動機づけには、外部からの報酬や、罰により、人間の行動を活性化させる「外発的動機づけ」と、行動を決定するのは自分自身であるという「内発的動機づけ」がある。

今回、SPの説明を集団で行うのではなく、個別に行ったことより、個々の看護師の内発的動機づけができたと考えられる。

先行研究では、「小児に対しての手袋着用率は成人に対して低い」という結果が得られていた。しかし、今回の研究結果においては、乳児・幼児・学童の間に手袋着用頻度の差はみられなかった。このことから、乳児・幼児・学童に差なく、手袋着用率を上昇させることができ、感染予防に努めることができたと考えられる。

今後も継続して、SPとしての、手袋着用を推進し、感染予防に努めていく必要がある。

## VI 結論

- 1) 個々にSPの説明を行うことが内発的動機づけとなり、手袋着用率の上昇につながった。
- 2) 手袋を各場所に設置し、物理的環境を整えたことで、手袋着用行動を強化することができた。
- 3) 手袋を各場所に設置し、SPの説明を行うことで、対象となる患児の年齢に差なく、手袋着用率が上昇した。

## 参考文献

- 1) 奈良県立医科大学附属病院院内感染防止委員会、2001：院内感染対策マニュアル。
- 2) 福森方子：小児病棟看護師と成人病棟看護師の清潔に関する認識の異なり—オムツ交換時に手袋を使用するか否かの調査を通して—、第33回日本看護学会論文集（看護管理）、67-69。
- 3) 莊村多加志：社会福祉士養成講座 11、心理学、中央法規出版、16—21、2000。